

令和 3 年 6 月 4 日現在

機関番号：33905

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02471

研究課題名(和文)加藤暁台の資料集成を基盤とする江戸中期俳諧の研究 - 「歌仙合」に着目して

研究課題名(英文)A Study of Haikai Poetry Focusing on Kasen Awase

研究代表者

寺島 徹(Terashima, Toru)

金城学院大学・人間科学部・教授

研究者番号：30410880

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：尾張の中興期俳人、加藤暁台の資料蒐集を中心に、中興期俳諧の調査研究を行った。未整備である暁台の俳諧資料を翻刻・紹介し、精確な本文を提供することを目指し、それとともに、散逸が懸念される未紹介の真蹟資料の収集と翻刻にもつとめた。とくに、これまで、俳諧史や雑俳史の中で、ほとんど注目されてこなかった「歌仙合」という遊戯性の高い俳諧様式とメカニズムに着目した。暁台の「歌仙合」の事例が、中興期俳諧において、どのように位置づけられるか、また、蕉風復興運動においてどのような意義があったのかを検証した。関連する研究として、暁台の句合の意図、『風羅念仏』事業の位置づけについても分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

全国の俳諧文庫や旧家における広域調査により、これまで未整備であった暁台の俳諧資料を総合的に蒐集し、俳書・俳諧資料を悉皆調査・整理し、暁台とその周辺におよぶ基礎資料の作成を試みることに学術的な特色がある。その資料の作成・校訂の過程を通じ、連句と連衆(作者たち)の関係にも迫る。とくに、「歌仙合」というこれまでまったく着目されてこなかった興行形態を軸に、他の連句資料と有機的に結び付けながら分析する点も本研究の独創的な点となる。

研究成果の概要(英文)：My research endeavors focused on collecting materials about Kato Kyotai, a revival period haikai poet from Owari Province. I introduced Kyotai's haikai drafts and aimed to provide precise texts. At the same time, I also endeavored to collect and reprint genuine undiscovered sources that were at risk of being scattered and lost. In particular, I focused on the highly playful haikai style and technique labeled kasen awase. The extant scholarship on the history of haikai and zappai poetry has barely attended to this practice. I obtained results by inspecting the ways in which examples of Kyotai's kasen awase in Shimoina could be positioned in the haikai of the revival period. I scrutinized the significance of this poetry technique on the Basho revival movement. As a related research initiative, I introduced undiscovered texts on Kyotai's verse-matching intentions and the position of the Fura Nenbutsu project, analyzing said materials in detail.

研究分野：近世文学

キーワード：蕉風復興運動 中興期俳諧 暁台 歌仙合

1. 研究開始当初の背景

- (1) 尾張の加藤暁台(1732~1792)は、安永・天明期(1772~1789)のいわゆる中興期に活躍した俳人である。蕪村の後ろ盾を得て蕉風復興運動を主導し、蕉門の俳書『去来抄』を公刊し、晩年には二条家俳諧を創始し、当時流行の月並句合も行った。もっとも典型的な中興期俳人の一人である。とくに、連句においては蕪村をして「俳諧の伯楽」と言わしめ、注目すべき存在であった。しかし、近年、元禄期の連句研究(深沢真二『旅する俳諧師』2015等)が盛んになってきているのに対して、中興期の連句研究は蕪村の注釈研究を除きあまり進んでいない。暁台の連句について資料収集と内容分析の両面から進めることにより、江戸中期の連句研究を進展させるのが本研究のねらいである。
- (2) この時代は、蕪村、也有、白雄については、連句、発句、俳文において全集が揃い、資料が整備されているものの、蕪村の盟友暁台には全集がなく、樽良、蓼太、蘭更にいたっては資料紹介も散発的にしかなされていない。とくに連句関係の資料整備が遅れている。そのような中、代表者は、これまで尾張の暁台、横井也有、井上士朗、伊勢の樽良など、江戸中期に活躍した俳人の事蹟、資料について調査を進めてきた。暁台においては、清水孝之、服部徳次郎、野田千平により俳書を中心に研究がなされてきた(清水『加藤暁台：研究・鑑賞・資料』1996等)のに対し、代表者は書簡資料・連句懐紙等の真蹟資料に光をあてることで、資料の掘り起こしを行ってきた。『百歌仙』等の紹介、「月並句合」「伝書」の分析等はその成果である。
- (3) 今回、連句に関する新たな視座として、江戸時代に行われた「歌仙合」という形式に着目する。代表者は、近年、連句資料の調査を進める中で、加藤暁台が「歌仙合」を行っていることを新たに見出した。このような点取りが江戸中期以後のいわゆる月並俳諧へと発展していくのが雑俳史の一面でもある。今回俎上に載せる「歌仙合」は、そのような連句評点や雑俳の流れに位置づけられるものの、宮本正信、鈴木勝忠ら雑俳研究者の文献(鈴木『近世俳諧史の基層』1992等)に数行触れられるのみで、比較的見過ごされてきた領域である。研究代表者は、暁台が月並句合や連句評点を行っていたことを、未紹介の資料を紹介しながら分析してきたが、新たに「歌仙合」を飯田の連衆に対して行っていることを突き止めるに至った。飯田を含め地方の資料は所蔵者の世代交代もみられ、散逸の恐れもあり、調査が急務である。『暁台半歌仙合』をはじめ、本研究において全国の文庫、個人宅(旧家)に散在する諸俳人の「歌仙合」の調査を行うことにより、中興期俳諧における「歌仙合」という興行形態が、俳諧史、雑俳史、連句史において、いかなる意味をもつのか位置づけようとした。

2. 研究の目的

- (1) 本研究では、資料調査(「歌仙合」資料、暁台連句資料)をもとに、資料の集成(暁台俳諧資料の集成、歌仙合の調査)を行い、その成果をもとに、中興期の連句文化の一面について説明することを目指した。暁台資料の集成と、「歌仙合」という形態の位置づけを行い、それにもとづく暁台の連句作品の特徴や興行形態の意義について明らかにしてゆくものである。
- (2) 暁台の歌仙合は、奈良大学図書館蔵の『暁台半歌仙合』と題簽(題名)のある写本で、暁台による点と判詞がある。そもそも「歌仙合」とは、判者(宗匠)が発句(5・7・5)を出し、それに対し、競技者が脇から挙句までを一人で詠み、連句を満尾(完成)させる。それに対して、判者が点を付け、根拠となる判詞を施し、参加者の中で点数を競うという遊戯性の高い点取り俳諧の一種である。点取り俳諧としては、江戸前期から連句に評点を施すことが行われ、元禄期以降は、前句(7・7)に付け句(5・7・5)を付ける前句付が盛んになった。暁台のような地方系蕉門俳人が歌仙合に手を染めた意味を明らかにすることで、蕉風復興運動の特徴の一面も解き明かすことが可能になると考えた。
- (3) 「暁台半歌仙合」は、翻刻・校訂を行うこととした。「諸俳人における「歌仙合」資料の調査と収集」については、研究協力者の力も借りながら、資料の所在を突き止め、調査・収集を行った。代表者のこれまでの科研費における調査の成果をもとに、翻刻、出典の精査、資料集成を行うこととした。暁台の作品集集成、「歌仙合」の調査、分析を行う過程の中で、暁台の連句作品との関わりを考えた。暁台は、天明3年(1783)前後に、蕪村の後ろ盾を得て、芭蕉百回忌取越追善事業(風羅念仏法要)において盛んに、脇起こし連句(歌仙)を行っていることが知られている。宗匠の出した発句をもとに歌仙を完成させる「歌仙合」と、発句(芭蕉)の脇起こしをもとに連句を行っていく脇起こし歌仙とは、構造上、表裏の関係にあると想定された。暁台、蕪村が主導した芭蕉顕彰運動の実態を「歌仙合」という視点を導入することで、より明確にすることができるものと考えた。
- (4) その上で、暁台の連句資料との比較考証を行い、中興期俳諧の連句機能の一面について明らかにすることを目指そうとした。また、このような遊戯性の高い文芸が、国語教育や地域活動の素材としてどのような意義を持ち得るのか考察しようとした。

3. 研究の方法

本研究では、暁台・士朗の資料収集・調査をもとに、資料集の作成・本文校訂を行い、江戸後期の芭蕉受容史の一面の解明ならびに国語教育への応用的教材化を目的とするものである。下記のように、各地の文庫や個人が所蔵する俳書、軸、短冊、書簡などの調査をもとに、書誌情報をもとめ、資料集を作成し、校訂・分析を行った。

- (1) 全国所蔵機関（大磯コレクション、天理図書館、伊丹市柿衛文庫等）の俳書調査。
重要な俳書、真蹟資料については、書誌調査も行い、細かくデータ化。
- (2) 調査で集めた歌仙合の整理分類。暁台の発句、連句等の入集状況と出典俳書の調査。
- (3) 作成した基礎資料をもとに、作品研究、俳壇研究、俳諧事象に関する考察・分析。
- (4) 作成した基礎資料のデータベース化、国語教育教材の提案。
- (5) 学会発表、論文発表による成果の公表

4. 研究成果

研究成果について、年度ごとに示し、総合的な知見、今後の課題について順次示していきたい。

(1) 年度ごとの研究の概要

平成 29 年度は、暁台の点取俳諧に関する資料の分析、考察を行った。暁台が行った『風羅念仏』法要の一環として『新幽蘭集』の架蔵本をもとに、翻刻、資料紹介を行った。また、加藤暁台の寛政三年の未紹介の月並句合の点帖資料を紹介し、晩年の暁台の点取俳諧への関わりについて分析した。学会の全国大会で、暁台の歌仙合について報告し、都市俳諧との違いについても、都市俳諧研究を専門とする参加者との意見交流をはかった。

平成 30 年度は、暁台の歌仙合に関する分析を論文にまとめ学会雑誌に発表した。とくに、未紹介の暁台の点帖をもとに、阿島俳人に行った歌仙合という催しについて分析した。この試みは尾張の大立者也有・鷗沙から続く、尾張俳壇と下伊那俳壇の交流という面であれば、わずかな点に過ぎない出来事である。だが、この歌仙合は、旧派の鷗沙の縁による他門への暁台の批評という点に大きな特徴があり、その意味を位置付けることができた。なお、尾張の月並句合に関する関連資料として、暁台の跡を継いだ桜田臥央の点帖資料の分析、資料紹介も行った。

令和 1 年度は、歌仙合、月並句合といった暁台の点取俳諧の発展的な研究として、化政期における塊翁（竹有）の月並句合についての分析も行った。塊翁は、下伊那俳壇、阿島俳壇との交流もみえ、也有、暁台の下伊那俳壇との交流について時代をこえて受け継いでもいた。この尾張俳壇と下伊那俳壇との交流の様相を掘り下げるため、喬木郷土資料館の一次資料の資料調査も行った。なお、点取俳諧の考察にくわえ、暁台の連句事業の一つである『風羅念仏』の調査研究も並行して進めた。とくに、これまで、行方がわからなかった『風羅念仏』「みちのく」巻の原本を調査することができた。概要を分析し、報告した。暁台に関連する調査として、東海市の横須賀地区の旧家における調査も行った。楓京と、也有、暁台の関係について、一枚物、一枚刷などの未紹介の資料を調査することができ、これまで不明であった知柱亭について人物を特定することもできた。その調査の概要について、学術誌に発表した。

令和 2 年度は、最終年度であるが、暁台の点取俳諧や連句資料に関する調査研究に基づきながら、その調査の成果をまとめつつ、資料の紹介、論文の公表などを行った。とくに、前年度に引き続き、横須賀関係の資料の翻刻、紹介を進め、また、暁台の句合の位置づけについても寛政期の一枚刷と安永期の一枚刷資料を比べることなどで考察を進め、成果を発表した。

(2) 本研究の総合的成果

全国の俳諧文庫の広域調査により、これまで未整備であった暁台の連句俳諧資料を総合的に集成し、俳書・俳諧資料を悉皆調査・整理し、暁台とその周辺におよぶ基礎資料の作成を試みた。その資料の作成・校訂の過程を通じ、連句と連衆（作者たち）の関係にも迫った。とくに、「歌仙合」というこれまでまったく着目されてこなかった興行形態を軸に、他の連句資料と有機的に結び付けながら分析も行った。「歌仙合」という看過されてきた俳諧形態を取り上げることにより、なぜ、雑俳史において「歌仙合」という特殊な形態が生じたのかその一面を分析し、さらに、暁台という蕉風系の宗匠が、いかなる理由でそれに手を染めたのかを明確にした。これは、芸術性を問われる蕉風の俳諧史と遊戯性の高い雑俳史との関係について明らかにする上でも意義深いことであったと考えられる。それとともに、江戸中期における種々の俳諧の本質的課題を解き明かす可能性も有している。「暁台半歌仙合」でいえば、連衆の飯田俳人との中馬街道（飯田街道）による俳諧ネットワークのあり方について、具体的な事例をもとに検証することが可能となった。風羅念仏法要における蕉風復興運動の実態、暁台晩年の月並句合の展開についても部分的にはあるが解明することができた。

なお、当初の目的からの発展的な研究として、暁台、士朗、五明における句合、脇越連句における資料も調査し、分析することができた。とくに、連携研究者の富田和子「井上士朗の書簡の紹介 - 道木正信氏コレクションから」（『椋山女学園研究論集』第 49 号、人文科学篇、2018 年 3

月)等の士朗書簡の紹介、分析からは大きな示唆を得た。

なお、代表者は、長年にわたり、遊戯性俳諧の応用として「全国高校生付け句コンクール」(豊田市文化振興財団主催)に企画・選考委員として携わり、国語教育の実践として論文も発表してきた。その実績をもとに本研究の連句調査研究、歌仙合研究等の基礎的研究の成果を、国語教育、地域活動の面でも新教材として活かす取り組みを企図し、国語教育・教育方法論の論文として発表した。

(3) 今後の課題

歌仙合を軸に暁台の連句、点取資料を相対化しようと試みた。上述のように一定の成果を得たものの、資料が膨大、多岐にわたることもあり、まだ道半ばである。今回の調査研究をきっかけとした継続的な資料調査の必要性が求められる。それとともに、資料整理を行っていく過程において、次々と新たな課題が出てきた。たとえば、暁台・士朗・樽良など、蕉村以外の中興期俳人と絵師との関係(呉春、芳中ら) また、暁台と五明の交流関係などについてである。このように視野を広げながら、今後、引き続き、江戸中期の尾張俳諧の調査研究を行っていく予定である。

また、蕉風復興運動の資料調査を進めるうちに、そこから帰納される事象として、蕉風復興における指導のありかたと、現代の協同学習における学習のあり方に、共通性があることが認められるようになった。協同学習における気づきと、座の文芸である俳諧の悟得のあり方とは、一脈通じる面が想定できるのではないだろうか。このような教育としての俳諧ということ、今後、検討していく必要性を感じている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 10件）

1. 著者名 寺島徹	4. 巻 16-1
2. 論文標題 芭蕉百回忌追善集『風羅念仏 みちのく』について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『金城学院大学論集』人文科学編	6. 最初と最後の頁 147-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 寺島徹	4. 巻 27
2. 論文標題 尾張横須賀における楓京と知柱亭・暁台・也有の交流について-白羽家所蔵資料を紹介して-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東海近世文学会『東海近世』	6. 最初と最後の頁 27-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 寺島徹	4. 巻 2020
2. 論文標題 安永後期の加藤暁台と句合の試み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 早稲田大学国文学会『国文学研究』190集	6. 最初と最後の頁 70-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 寺島徹	4. 巻 135
2. 論文標題 加藤暁台と半歌仙合の試み 晩年における下伊那・阿島俳壇への批点をめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 連歌俳諧研究	6. 最初と最後の頁 15-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 寺島徹	4. 巻 15-1
2. 論文標題 寛政・享和期における桜田臥央の点帖資料について 江戸後期尾張俳壇の月並句合(二)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『金城学院大学論集』人文科学編	6. 最初と最後の頁 183-172
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 寺島徹	4. 巻 15-2
2. 論文標題 化政期における大鶴庵塊翁の月並句合について 江戸後期尾張俳壇の月並句合(三)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『金城学院大学論集』人文科学編	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 寺島徹	4. 巻 14-1
2. 論文標題 芭蕉百回忌追善「風羅念仏」事業と『新幽蘭集』 曾洛の暁台頭彰活動(二)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『金城学院大学論集』人文科学編	6. 最初と最後の頁 15-37
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 寺島徹	4. 巻 14-2
2. 論文標題 加藤暁台の点帖資料(寛政二年)について 江戸後期尾張俳壇の月並句合(一)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『金城学院大学論集』人文科学編	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 寺島徹	4. 巻 16-2
2. 論文標題 横井也有と知多俳壇の交流：東海市白羽家資料の紹介（一）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『金城学院大学論集』 人文科学編	6. 最初と最後の頁 202-191
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 寺島徹	4. 巻 17-1
2. 論文標題 安永期における暁台の俳諧摺物について-東海市白羽家資料の紹介（二）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『金城学院大学論集』 人文科学編	6. 最初と最後の頁 15-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 寺島徹	4. 巻 17-2
2. 論文標題 「創作と鑑賞の過程における「思考力・判断力・表現力等」の育成-幼保小における言葉の発達の検討と教育方法の開発」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『金城学院大学論集』 人文科学編	6. 最初と最後の頁 17-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 寺島徹	4. 巻 18
2. 論文標題 中興期俳諧における蕉風史観の一考察-吉川五明の『小夜話』を手がかりに	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『日本文学研究ジャーナル』	6. 最初と最後の頁 113-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 寺島徹
2. 発表標題 連句系教材による授業実践の現状と課題
3. 学会等名 早稲田大学国語教育学会 4 月例会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 寺島徹
2. 発表標題 暁台と蕪村の交流と軋轢について 「虚栗調」と作法を視座として
3. 学会等名 2018年度早稲田大学国文学会秋季大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 寺島徹
2. 発表標題 安永天明期の尾張俳壇と歌仙合 飯田俳人との交流事例をもとに
3. 学会等名 東海近世文学会（第269回）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 寺島徹
2. 発表標題 江戸後期における尾張俳壇と飯田俳壇の交流-暁台判の歌仙合をもとに-
3. 学会等名 俳文学会第69回全国大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 松井忍・寺島徹・服部直子・福田安典	4. 発行年 2020年
2. 出版社 和泉書院	5. 総ページ数 718
3. 書名 伊予俳人 栗田樽堂全集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	富田 和子 (tomida kazuko) (20155568)	椋山女子大学・生活科学部・助教 (33906)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------